資料

2012年9月23日東松島訪問記

大木雅文氏記（千葉在住）

。。。今回の東松島訪問によって、私が被災者の心に寄り添えたとは思わない。彼らの悲しみや寂しさの深さや痛みは、その身になれない私には簡単に分かるわけがない。だが、分かろうとしようとする自分がいるという発見は悪くない。被災者の方々にとって生きるための戦いは、人々の関心が薄れるこれからが本番かもしれない。権力を持つほどに大きくなる「弱気をくじく」構造や、権力に巧妙におもねって権力を裏から助けるマスコミを、根底から変革するのは容易ではないが、あきらめる必要は無い。日本は、今の権力では手に負えない大きな問題を抱える。グローバルな社会の外圧に変革の引き金を引いてもらわなければならないかもしれない。被災者を支援する具体的な方法を考え続けて、できれば行動に移すということと、世の中をよくするために自身の義務と権利と能力の範囲で政治に参加することが悠長にみえても確実にトライすべきことだろうという気がする。まだもう少し考えなければならないが。

東松島訪問の機会を与えてくださり、長時間にわたり貴重なお話をしてくださった石川住職に、心からお礼をもうしあげます。

２０１２年１０月２８日

2012年9月23日　東松島訪問記

先月23日に東松島市に行った。被災地を見て、石川住職にお会いし、話を伺うために。5時間近くお付き合いくださった石川住職のお話と私の感想を走り書きのメモをもとに以下に記述した。記録するためである。記録を公開する気はないが、この記録の内容を周囲の人々に口頭でできるだけ伝えていきたいと思う。石川住職にご迷惑がかかる結果にならないように十分気をつけて。

訪問日と訪問場所

- 9月23日（日）5:40am、千葉市美浜区高浜の自宅を出発、東関道、首都高、東北自動車道、仙台南部道路、仙台東部道路、三陸自動車道を経て矢本インターで高速道路を降りる。途中東北道走行中は時折の豪雨を含む雨が続いたが、三陸自動車道に入ってからは小雨。
- 9月23日（日）11:15amに東松島市矢本のイオンタウンで萬寳院住職石川仁徳氏と対面。内海義雄自治会長も一緒。このイオンタウンは昨年3月11日の地震・津波発生以前にできたショッピングセンターで、コの字型に並ぶイオンのスーパーマーケットや専門店に囲まれて駐車場がある。地震による損壊は免れ、津波もここまでは到達しなかったために無事であった。
- 待ち合わせた駐車場で日暮幸恵さんから託された石川住職宛の手紙を手渡し、同じく彼女が用意した物資の段ボールを白いワゴン車のトランクに移した。ワゴン車には萬寳院という大きな文字が黒々と書かれている。なにやら「萬寳院がついているから安心しろ。」と被災者に呼びかけているように見えた。
- そこから「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」へ直行。着いたのは11:30am
所在地名は宮城県東松島市大塩字緑ヶ丘4丁目4-4
- 「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」の敷地内にあるプレハブの「ひまわり集会所」で面談。広さは50坪から60坪くらい。子供遊具や本の並んだ本棚や、古いソファーや、会議や作業ができる大きめのテーブルとパイプ椅子が備えられている。一隅には、お土産コーナーがあり住民手作りのアクセサリー類を販売している。その中の「蜆の携帯ストラップ」を20個購入した。パッケージの台紙一枚一枚に被災者の心情が筆で短く綴られている。「海よ　父を見かけたら伝えて欲しい　仮設で待ってる家族がいると」、「線路が途中でなくなっている　おじいちゃんちへいけないね」…　胸が詰まる。

- 作業場では内海自治会長婦人である副会長の聡子さんも他の女性数名と作業をしていた。
- 折しも、大勢の若者がリュックやバッグを持って集会所を去ろうとしているところだった。東京農大の学生約40名で、毎月1回定期的に訪問し野菜の作り方を住民に指導していくとのこと。1回の滞在日数は3,4日で、自前のバスに乗り寝袋持参で来て集会所に寝泊りする。集会所の人が私におはぎ（ゴマとつぶし餡）と茄子の漬物と麦茶を振舞ってくれたが、茄子は自家製であり、おはぎも農大生と作ったもの。リュックの若者たちを頼もしく感じた。
- 「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」の集会所から萬寶院の仮本堂への案内を乞い、14:00頃出発し10分程度で到着。そこで線香をあげさせてもらい、2時間ほど継続して話を伺った。震災発生直後の状況を撮影した多数のA4サイズの写真を拝見し、当時の生々しい状況をよりよく理解することができた。

仮設住宅の状況

- 訪問した「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」は560世帯分の集合住宅。270世帯の高台グループと、240世帯のそれより低い地帯のグループと、その他50世帯の3グループから構成される。移転などにより現在30世帯から50世帯分の空き部屋がある。
- 東松島市全体で3,000世帯の仮設住宅があるが、このうち1,500世帯を石川住職がケアしている。
- 仮設住宅は4.5畳二間（横3間、幅1.5間）に6畳相当（横3間、幅1間）のユーティリティースペース（キッチン、トイレ、バス）がついているので平面図だと横3間、幅2.5間の広さである。
- それが8件以上連なる長屋がひと棟であり、「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」には約50棟以上あることになる。
- 4.5畳の部屋にはユーティリティーと反対側に床から80センチ位の高さに幅1間程度の高窓がある。ユーティリティースペースにはドアが着いていて外との出入りはそこからできるだけだが寒冷地のため二重構造になっている。4.5畳の部屋には床から立ち上がる窓が無いため風通しが悪く掃き出しができない。また壁は薄く外の冷気を防ぐ効果薄く葺き替えてもらったが効果なし。最初から厚い壁にしておけば無駄な費用もかけずに済んだ。これらの応急仮設住宅は昨年の5月に完成し入居したが、今もこれからも応急仮設のままである。仮設住宅はメーカーの標準設計に基づく仕様だそうだが、阪神淡路大

震災のときも以上の点が問題になったにもかかわらず標準仕様が改善されていない。教訓が生かされていないということだ。そこに住む人の身になって行政が関与してメーカーが設計した住居ではない。(商品開発に被災者であるユーザーのニーズが反映されていないという共産主義社会のような現実。発注者が避難民とは関係の無い役所だからか？商品の優劣比較をしたり競合見積もりなど取っている時間は無いから指定業者の言いなりなのか？)

- 壁の薄さと風通しの悪さはそのまま猛暑時期の弱点ともなる。赤十字から至急されたエアコンは当初 4.5 畳二間（ふたま）のうちひと間にしか設置してもらえなかったが交渉・申請してもうひと間にも入れてもらった。

「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」の自治会

- 500 以上の世帯が集まってそれぞれが自由に生活すれば種々の問題が起こる。外部から与えられる不都合に対して集団として対処する必要も出てくる。そこで石川住職は自治会の必要を考えこの町に自治会を作った。市役所から自治会長と副会長には手当てが出ることになったが少額であり、自治会の運営や活動を行うにはとても足りない。
- しかし石川住職の効果的なリーダーシップのもとに実施する自主的な活動や、外部からの継続的なボランティア支援により「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」の人々について、「最近人々の心がやわらかくなったように見える。東北ならではの人々の気質もその一因かもしれない。」と石川住職は語った。悲しみや寂しさを共有する住民同士の連帯ができたのかもしれない。私のようなボランティアでもない突然の訪問者を、貴重な漬物や茶やおはぎでもてなすなど他の仮設住宅では考えられないそうだ。さもありなん。
- 時がたつと人の情は薄れる。
- ここを訪れた人が、災害に見舞われたときにどのように命を守るか、周囲の人とどう付き合うかなどを学び、南海トラフ地震や東海地震が起こったら役立てて欲しい。

自治会のひまわり集会所

- 集会所は自治会や継続的支援者やボランティアの活動の拠点でもある。キリスト教、仏教寺院、個人、各種団体などが訪れる。
- 集会所には電話が設置されている。市役所と交渉し許可をもらい、自治会作品販売の収益の中から電話機、または設置代を捻出させた。

金銭の調達

- 石川住職が被災者支援のために投入した私財と他からの義援金は、萬寶院の持ち物すべて、妹さんと母上の生命保険金、それに石川住職が訪ね歩いて集めた天台宗の他寺院からの見舞金 2,700 万円である。
- それから現在に至るまで、石川住職が各地の寺や本部を回り、寄付や物資の提供による支援を募り続け、被災者の生活のかなりの部分を支えてきた。

クルマの調達

- 津波により被災者のクルマはほぼすべて流された。他の公共交通機関も壊滅的で復旧した後も利用は不便なため、通勤、買い物、病院通い、町役場や市役所への手続き、就職活動、その他の必要な外出に車は不可欠である。石川住職は全国の天台宗寺院や知己にクルマの提供を依頼して回った。遠方の寺院が中古車を提供してくれる場合などは、そこへ出向き自分で運転して持ち帰った。中古の軽自動車でも 2 年間の車検付だと安くて 35 万円から 50 万円の購入費が必要である。それに任意の損害保険の費用が加算される。他の寺院や一般の支援者の協力を得て現在 35 台の車を入手して活用している。
- 当初住職は、入手したクルマは所有権を被災者に移そうとしたが、残念ながら被災者の中には提供された車をすぐに転売して現金化しようという人も現れた。そこですべてのクルマを次の車検時期がくるまでは住職が所有しその管理下に置き、被災者に自由に使用させることにした。

自衛隊に感謝

- 被災者がもっとも感謝しているのは自衛隊であるが、それは自衛隊が救助活動や初期の瓦礫除去活動の最大の貢献者であるから。
- 緊急性を要する非常時には現場の判断を優先すべきだが自衛隊はそのように行動した。
- その後に政治家が来て心のケアをする必要があったが、それはなかった。
- 学者は、全員ではないが、被災者の救済には関心があるようには見えず、被災者の状況や心理状態の変化など統計をとりそれを分析し結果を見て喜んでいる。被災者はまるで調査対象か研究材料でしかない。

行政の問題

国の義援金支給に5ヶ月かかった。

- 被災者に支援金が給付されたのは災害発生から5ヶ月も経過した昨年の8月であった。それも一括ではなく何回かの分割である。原資は昨年3月に準備されたにもかかわらず、これほど支給が遅れたのは、被災者の被災の程度を細かく調査して公平に支払うべきであるという行政の意図によるものだろうが、被災者は災害直後に最もお金を必要としたのだから、せめて誰もがもらえる最小額を迅速に支払い、残りを後で支払うこともできたはずである。緊急性の意識低く柔軟性に欠ける姿勢だ。個別の支給額の不平等や不公平に異議や批判が出ることを恐れ、支給額算出の根拠を落ち度なく固めることに執着するあまり、5ヶ月もの時間を費やしたわけで、被災者の救済が緊急事項であり最優先と考えない政治家、役人の保身が原因と思わざるを得ない。

地方自治体主導のボランティア活動

- ボランティア活動も種々あるし、活動している人々の考え方や具体的活動も多岐に渡っているのでボランティア活動全般について言えることではないが、ネットで見る東松島市のボランティア活動は低調であると私は感じた。石川住職の説明はそれを裏付ける内容であった。市の公式なボランティアは市役所の傘下におかれたいわば御用ボランティアである。市役所や町役場などの地方自治体は国の行政の下部組織であり、復旧や被災者救済の予算も国やそれぞれに自治体からあてがわれる。その予算を行政の上部の監督官庁から文句を言われないように消化することを優先する結果、子供を集めて学芸会もどきの小さなイベントを実施しそれを記事として掲載したコミュニティー紙（新聞）を発行するなど「無いよりはいい」という程度の活動で済ますことになる。被災者を支援するもっと有効な予算の使い方はいろいろあるだろうが、役所の職員にとって面倒でリスクのあることはしたくないという気持ちが、自分たちの意図通りに動くボランティアを傘下に置き、目の届く範囲で無難な活動を続けることを優先させるのだろう。石川住職がリードする支援活動などがより有意義であることは自身が震災・津波の被害者である職員も理解しないはずは無いが、特定宗教とは一線を画すという行政の方針に従って、身を守ることが優先されるのだろう。実際、そういうボランティアも何をして良いか分からず、石川住職に助言を求めにくるという。市職員はそれを見て見ぬ振りをするのが精一杯なのかもしれない。

高台の地価は路線価、もしくは震災前までの価格20倍から30倍

- 家屋を流失した被災者で余裕がある人々は、津波が届かない高台に新たに土地を購入して家を新築することを望むが、該当する土地の価格は震災前の20倍から30倍に高騰して手が届かなくなっている。地主と不動産業者が結託してのことであろうと思われる。1990年代の土地バブルの際にも地価は高騰したが、時の政府は特例法を設置し地価を抑制するために上限を設定した。今回も直ちにそうすべきだが行政は何故か動かない。

市当局は住民に仮設住宅立ち退き後の方針を10月までに報告するよう要求

- 仮設住宅の住民に対して、今年10月（今月）までに仮設住宅を退去した後の方針を報告するよう市は求めてきた。数年は居住してかまわないという前提である。
- 本来国や地方自治体がまず被災地復興のグラウンドプランを提示すべきであり、その計画には当然、家を失った被災住民が暮らせる土地や住居の具体的なプランも含まれるべきである。それを示さずに、やみくもに仮設住宅退去後の方針を今月中に出せと言うのは非現実的で配慮に欠けた理不尽な要求であると思う。

学者主導による防災計画策定の問題

- 国立大学の縄張り制度によるのか、今回の地震や津波の科学的な原因究明や今後の有効な対策については東北大学の、地震学の権威といわれる某教授の主導のもとに行われている。彼は2004年12月26日のスマトラ沖地震･インド洋大津波の視察研究のため官費で現地に赴いた。死者22万人、行方不明者8万人、負傷者13万人という大惨事を彼は「想定外」の規模の災害であると結論した。そして三陸海岸はその結果を踏まえた彼の防災計画を適用して堤防など建設したにもかかわらず、今回の悲惨な結果を招いた。
  それに対して彼は再び「想定外」だったと結論した。彼を「人殺し」と呼ぶ声もあるという。恐ろしいことに、政府の方針によるものか、次の防災計画もこの教授の主導で策定される。信じ難いことだ。
- 一方で、今回の地震は巨大な地下プレートが沈んだ（ずれた）ことにより発生したが、沈んだプレートは将来再び盛り上がるという学説があるという。そうであれば莫大な費用がかかる土盛工事は不要となる。その学説の検証もしないままに復興計画が立てられるのも納得しがたい。

- 被災者の精神状態を統計にとり分析結果のみに興味を持つ学者の行為も含めて、学問は被災者を救済したり自然災害に対する有効な防御策を策定したりすることに貢献できないのか？

報道されない事実と大手マスコミの罪

- 津波に呑まれただけでは泳げる人は簡単には死なない。津波で死んだ人の大半は、家屋、建造物、岩石、木材、車などに身体を打ちつけられた打撲・骨折が直接の死因である。
- 明日にでも進水しようという24,000トンの貨物船が津波に流され、陸に押し上げられた。その巨大な船は多くの家屋を破壊しながら押し流し、波に流される多くの人の骨を砕き、押し潰した。更に水中で横倒しになった船の船首と船尾を勢いよく回り込んだ海水はそこで強力な渦を巻き起こし、大勢の人やものを水中に引きずり込んだ。造船中のこの船はしっかり繋留されていたのだろうか？船主からも造船所からも謝罪や悔やみの声は一言も無く、船主は支援金と融資を得て再び船を建造しようとしている。
- 上記と同様のことは近隣のパルプ会社が備蓄していた木材についても言える。これらは大量に流され多くの人を犠牲にした。
- 行政の問題点の箇所でも述べたが、高台の土地が路線価や震災前の地価を大幅に上回り急騰している。新たな土地に家を建てようとする人の希望を打ち砕く非情な所業だ。
- 以上のことは、全国紙やテレビでは報道されていない。取材により実態は理解しても報道は抑え気味だ。京都新聞、河北新報などいくつかの心ある地方紙が部分的に報道したくらいだ。私の感想であるが、朝日新聞をはじめとする日本の大新聞や全国ネットを組める東京や大阪のキー局は表向き反権力を標榜しリベラルであるかのごとく装うが、実は巧妙な自主規制により核心部分はタブーとして報道せず国家権力を守ることで相互利益を図っているという実態が見える気がする。また、不思議なことに、折りあるごとに大新聞を目の仇にしてスキャンダラスな記事を連発する出版社系の週刊誌もこれらの実態を記事にしない。“ジャーナリズム”は日本では殆ど死語なのだろうか。

仏教界、天台宗の問題

- 今回の大震災の後、被災者救済のために仏教の僧侶が期待したほど動かなかったのに石川住職は失望した。天台宗にはおよそ 3,600 名の僧侶がいる。そのうち今回立ち上がったのは 3%にあたる 100 名ほどでしかなかった。震災直後には発見された遺体の葬儀を親

族から望まれるが、近隣のほとんどの僧侶は自分が被災者であり人の葬式どころではないという姿勢。石川住職は、萬寳院は流され墓地は泥沼化していたが、避難所や市役所に「葬式を引き受けます。」という張り紙をし48体の遺体を無償で荼毘に付した。

- 天台宗本部（本山）は積極的に支援してくれるが、天台宗の本山とは別の天台宗の組織から本山の機関紙である天台ジャーナルに萬寳院の記事を載せすぎだという批判を耳にするのは残念なことだ。
- 日本には仏教寺院が約7万寺ある。僧侶の数は10万人。7万寺のうち1万寺は同じ僧侶が管理している兼務寺と推計すると6万寺が実効数と推計される。今回6万世帯が被災したのでひとつの寺が1世帯の面倒を見れば済むではないかと石川住職は考える。

NPO法人設立の意義

- 国や県からの支援金は災害発生後5ヶ月経過した昨年8月に支給された。一世帯あたり平均100万円から150万円である。家屋の倒壊に対する支援は家屋の損壊の程度によって支給額が決まる。全壊の場合は200万円から250万円である。東北の人々の忍耐強さと不平不満を言わない寡黙さが美徳として他国から賞賛されたが、今回の支援金支払いの大幅な遅れはその美徳に付け込んでいると思われても仕方ない。
- 被災者の多くが家族を失い、職を失っている。今頼れる収入は、支援金と寄付などの義援金と、高齢者に支給される年金のみである。避難所から仮設住宅に移ると電気代、水道料金、ガス代などの光熱費はすべて自己負担になるうえに、全国から寄せられる物資や食料などの支給も避難所生活の時よりは得にくくなる。光熱費のみで世帯平均月7万円。小額の年金で生活することを余儀なくされる高齢者にとって将来の不安は大きい。
- 仮設住宅に居住する被災者グループを非営利法人化(NPO法人)することを市に申請し認可を受ける過程にある。雇用機会の創出と自立が目的である。またNPOに対する寄付金は所得税から控除されるので寄付が受けやすくなるという利点もある。
- このNPO法人をベースに収入を得るための活動を行う。アクセサリーなどの制作販売に加えて、陶磁器（焼き物）を販売する予定だ。窯を作り、陶工を千葉県から招き法人メンバーに陶磁器制作の技術を習得させるべく準備している。
- 石川住職がその活動拠点の土地を無償で提供し、窯もそこに作り、千葉からプロの陶工を招聘し技術習得の指導を託す。
- その他に、対価を得られる活動を立案し実行していく計画である。

ボランティアの問題-

- 被災者が市から支給された罹災証明や被災証明を、それを使用する資格の無いボランティアと称する外部の人に与えた。彼らはそれを利用して高速料金を支払わないなど被災者と同じ恩恵を受けた。
- 電化製品のリストを横流しして利益を得た。
- 約束した継続的支援活動を途中で投げ出しやめてしまう。腹をくくってから始めるべきだ。
- これら、ボランティアの名を借りて、被災者の弱みに付け込むような行為は許されない。

赤十字の問題

- 赤十字を通じて支援しようと赤十字に寄付金を送った人は国内外で莫大な数に及ぶと思われる。しかし、それを被災地に反映する赤十字のアクションは遅かった。彼らは家電製品を購入して提供してくれたが、すべての対象者に一度期にしようとしたためにかなりの時間がかかった。（ネットに公開されている日本赤十字の平成 23 年度の収支決算書によると、震災義援金収入は 3,146 億円で、そのうち 3,101 億円が被災した被災都道府県の義援金配分委員会に送金されたことになっている。莫大な金額であるが、だとすると、その金で家電製品を買って支給することに決めて実施したのは日本赤十字でなく宮城県ということになるが、事実はどうなのだろう？ちなみに宮城県には全体の 50%以上の 1,570 億円が送金されている。）

萬寶院仮本堂

- 「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」からクルマで 10 分程度の距離にプレハブ作りの仮本堂がある。所在地は萬寶院の墓地に隣接しており、所在地は。東松島市大曲字上台 54-154
- 海岸に近く津波により墓地が泥沼化した場所である。
- プレハブの概観に相違して内部はお寺の立派な本堂である。本尊の観音像をはじめ須弥壇や本尊を取り巻く種々の仏具や装飾品も美しく磨かれ、荘厳な雰囲気を醸している。
- 石川住職によれば、すべて他の寺々から寄贈されたもので、須弥壇の台は津波で倒壊した旅館の広間の舞台に使われていた材料を使った手造りである。見事に加工されている。

- 墓地の墓石はすべて倒れ、津波がもたらした泥を厚くかぶった。ショベルカーを導入して泥を除去しすべて墓石を建て直しもとの墓地に戻した。ダンプ10台分の泥が除かれたという。
- この仮本堂で約2時間、集会所の話の続きを伺った。

仏教について

- 自己の欲を抑制し他にも分け与えるという思想が根本。
- 束縛はしないが制約はある。
- 観音菩薩は33の異なる身体で衆生を救う。
- 疑いを持たずに素直に聴く姿勢が大切。子供のことを坊主（ぼうしゅ⇒ぼうず）と呼ぶのはそれ故である。子供は天衣無縫、すなわち素直である。
- 人間には不自由なことがあってよい。自然に振り回されてよい。ほどほどがよい。
- 「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」の所在地名は大塩という。大昔はそこまで海が来ていたのであろう。今また海が戻ってきたと考えることもできる。
- 「人生は苦しみと悲しみの連続である。それを生きるにはあらゆる種類の欲を捨てなければならい。愛さえも仏教では愛欲として否定される。すべての欲から解放されたときが悟り（解脱）のときであり、解脱できない限り転生を繰り返し六道を生きるしかない。」というのが仏教の教えであると、私は何かで読んだことがある。天災に遭遇し家族を失い、家を失ったときに「神も仏も無いものか」と嘆くのは間違いかと石川住職に尋ねたときに、石川住職が上記のことを静かに述べられた。よく考えてみよう。

東北人について

- 東北人は忍耐強く他人に対する思いやりの心に富む。それは古代より過酷な冬の気候に耐え、中央の権力者によって搾取され虐げられて生き抜いてきた長い歴史によるものである。
- 東北人は京都や東京（江戸）の人を信用しない。その警戒心が口数を少なくし特有の方言を育てた。東北の方言は非常に短い言葉が多く、他地域の人と話していてもいざとなれば、それらの人に分からぬように、そばにいる仲間と瞬時に方言でやり取りができる。
- 「グリーンタウンやもと応急仮設住宅」の集会所で販売している携帯のストラップに蜆貝を使っているのは、口を閉ざして話さないという意味が含まれている。

- 石川住職が語られた、上記の話は私には十分納得のいく内容であった。大陸から弥生文明を携えて渡来した民族によって確立された大和朝廷は日本在来の民族である縄文人を、縄文人が大和朝廷の皇が日本在来民族でないことを知る生き証人であるがゆえに、殲滅させるべく攻撃した。その結果、縄文人は日本列島の北と南に逃れなければならなかった。しかし生き証人であり大和朝廷に従わない異民族は滅ぼさなければならず、彼らを蝦夷（南九州の場合は、熊襲や隼人）と呼んで、奈良時代も平安時代も多数の兵をたびたび送り滅亡を企てた。平安時代に栄えた藤原三代ですら、京都の朝廷から見れば夷狄であり攻撃の機会を狙っていたに違いないと私は想像するのである。奥州藤原氏を滅ぼした源頼朝が征夷大将軍であったのは単に武家の棟梁であること以上の意味を持っていたのではないかと思う。それほど東北の人々は長い歴史のなかで搾取され虐げられてきた。その仮説と石川住職の説明は合致すると思う。

石川仁徳住職について

- 石川住職は平成7年に仙台より東松島に移住し前住職のお父上の後を継いで、平成17年より萬寶院住職を務めている。仏道修行を始めたのは千葉県の芝山のある寺院。私が住む千葉市美浜区高浜にも檀家が居るのであながち無縁ではない。
- 昨年3月11日は仙台在住の妹さんがたまたま東松島に来ており不幸にも津波に巻き込まれた。石川住職はクルマの中の妹さんから助けを求める最期（断末魔）の声を聞いた。引き揚げられた遺体は骨折がひどかった。
- お母上はやはり津波に呑まれ、いまだにご遺体は発見されていない。
- 石川住職自身が海につかり遺体を引き揚げた。どの遺体も打撲で骨折がひどかった。海面下は地獄であった。
- 3月11日の夜一晩は呆然と過ごしたが、翌日から精力的に被災者の救済活動を始めた。
- 20歳から仏道修行を始めた今年32歳のご子息は、昨年、本山（比叡山延暦寺）から千日回峰行の登竜門と言われる百日行を許可されたが、その直後に震災が起こり百日行を断念し、萬寶院の再建の資金を蓄えるために一旦還俗し大阪で建設会社社員として働いている。
- 現在、石川住職は仙台の妹さんのアパートに住み、毎日クルマで東松島に通っている。
- 萬寶院の仮事務所をそのアパートに置いている。所在地は仙台市宮城野区高砂2丁目6-1大森ハイツ102号

- 石川住職は幼いころからご両親に喜ばれることを最大の喜びとして生きてこられた。
- 一方で、負けん気が強く、人に負けたくないと思い続け、そのために常に強力なライバルを設定してその分野で力をつけることに努力した。
- この非常時に地元の人々に貢献したいと強く願った。

石川住職のお考えと方針

- 昨年3月11日の大震災直後の被災者にとってもっとも必要だったのは飢えを満たし暖をとることであった。その日の夜は雪が降り津波からは逃れたものの凍え死んだ被災者が多数いた。
- 支援物資に関しては新品にこだわる。
- 実際の生活で求められる品揃えが救援物資として必要。たとえば毛布だけでなく枕もとか。食料だけでなく食事の後に使う爪楊枝とか。
- 衣料品も当初段ボールに詰められて送られてきて、被災者は段ボールの中身をひっくり返して合うサイズや好みのスタイルを捜すが、あとはそのまま。それをいちいち畳んで段ボールに戻しても同じことの繰り返し。そこで衣料を1着ずつハンガーにかけ、それらをパイプ製のストレートハンガーに並べてかけることで、被災者は望むものを捜しやすく、後片付けも手間がかからないという方法に変えた。工夫が必要で思いついたらすぐにやってみることが大切。
- 優先避難所とみなし避難所（公的な避難所ではない私的な避難所）では物資の供給に差があるので、同じサービスが受けられるように市役所に交渉してバックアップを得た。
- 地震発生から385日間で15万キロメートル車を運転した。今の車は2台目。
- それに加えて被災して亡くなった人々の葬儀や供養を行った（86 体）。東京・品川や山形の火葬場にも同行した。
- 津波に流され海辺に浮かぶ車を引き揚げるのは命がけ。自衛隊が大きな家屋や建造物を重機で引き揚げて波が引いている間にすばやく引き揚げるしかない。
- 物資の配り方も工夫が必要。状況を考慮しメリハリをつけて配分しなければならないが、大多数の被災者が不満を感じない公平と思われる方法をとる必要がある。しかし完璧を望むと時間ばかりかかって進まない。最終成果をあげることが目的。
- 震災直後、石川住職が集めたかなりの数量の家電品や生活必需品のすべてを各地区の代表者を呼んで持って行かせた。石川住職は、彼らが持ち帰った家電品を近所の世帯に適

切に配分することを想定したからであるが、自治会長は代表者がそれらの家電品や生活必需品を独り占めすれば不公平になると懸念した。石川住職は、全世帯に公平に配分して個別に渡すことが自分や自治会長には時間的にも能力的にも無理であることを踏まえ、公平に配分するという目的が完全に達せられなくても 8 割方達せられればよいという現実的な視点で判断したのである。配分に時間をかけるよりも迅速な行動の方が重要である場合もある。

- あらかじめ用途を決めた寄付金や義援金を頂くのも良いが、石川住職の立場だと用途は任せてもらったほうがありがたいということが多い。目的別に費用を分担しても実際にはプラスマイナスの隙間が生じ、それを埋めるための費用が必要になるが、特定目的に使うことを前提として寄付されたお金は、隙間調整のためには使えない。

支援者にお願いしたいこと

- 被災者の深く傷ついた心情や、置かれた状況をしっかり理解しようと努め、ただ見ていることはできないから何らかの支援、応援をしたいという「気持ち」が、第一。
  そこから生じる「物資」、「金銭」、「クルマ」、「米」そして「夢」を提供。
- 東北人は米さえあれば生きられる。毎月 2 回、2.5 トンの米を約 500 世帯に配っている。一袋 5Kg が 500 袋。5Kg のずっしりとした重みは米の袋を渡された被災者を心強くする力を持つ。「夢」とは将来の生き方を決めるヒントや力になるような何か。それには生きがいとなりそうなことが含まれるのがよい。具体的には 6 人から 10 人でできることで対価を支払われるに値することを見つけたい。人の情は時が経てば薄れる。生きるための糧を得る手段を失った人々にとって支援金や義援金に依存しない生活を手に入れることが最大のしかも緊急の課題。
- といって、余り深刻に「かわいそうだ、気の毒だ。」という気持ちで被災地を訪れられると困る。遊びが必要
- ボランティアはコミットした活動なら途中であきらめずに最後までやって欲しい。
- 被災者に期待をさせすぎるような行動は慎んで欲しい。
- 単発なのか継続なのか、はじめに明確にすべき。けじめや区切りが必要
- 仁義は大切

萬實院仮本堂を辞したのは、9 月 23 日午後 4 時ころであった。カーナビを頼りに三陸自動車

道を通って松島のホテル着いたのは午後5時半。ホテルに通じる一般道の渋滞はひどく雨脚は強くなっていた。午後6時半に塩釜に住む旧来の知人がホテルを訪れ二人で夕食を取りながら積もる話をした。彼の家は1階が津波で浸水したが2階は無事だったので、避難所には行かず2階で家族が生活していた。最近ようやく1階の修繕が終わった。長女は多賀城の小売店にクルマで通勤していたが津波でクルマを流された。それにしても家族が全員無事だったのは幸運であったと彼は述懐した。その通りだと思った。雨は次第に激しくなり仙台から松島にかけては集中豪雨警報が発令された。話は尽きないが天候が気になるので午後8時半にお開きとし、彼は塩釜の自宅にクルマで帰っていった。

翌9月24日（月曜日）は、午前9時半にホテルを出発し東北自動車道を北上して平泉へ。坂上田村麿創建と伝わる西光寺達谷窟を皮切りに、毛越寺跡、観自在王院跡、中尊寺と金色堂、高館の義経堂、無量光院跡を訪ねた。恨みも辛みも無い蝦夷の頭領・悪路王（アテルイ）を朝廷の命で京都から討ちに来た征夷大将軍・坂上田村麿の心情を勝手に忖度したり、京を凌ぐといわれた規模と華やかさの都、平泉をその主であった藤原一族のみでなく建造物までも完全破壊に導いたのは何であったのか、そんなことを考えた。石川住職と昨日話した、歴史的に中央権力に搾取され虐げられてきた東北という土地の宿命を思った。源頼朝は征夷大将軍である。そのタイトルの意味は坂上田村麿のそれとは異なり、武家の棟梁（幕府の長）という意味位にしか捉えていなかったが、今思うと奥州藤原を滅亡させた頼朝は本来の意味の征夷大将軍だったのではないか。奥州藤原の祖である清衡は、京都の貴族、藤原経清と安倍一族の頭領であった安倍頼良の娘の間にできた子である。従って初代清衡に始まり4代目の泰衡で滅亡した奥州藤原家は蝦夷との藤原の混血であり、京の朝廷や貴族や他の武士からは蝦夷と見られていた可能性が高い。頼朝は征夷大将軍の官職を強く望んだが、後白河法皇は生涯それを許さず、頼朝が征夷大将軍に就任したのは後白河法皇が死んだのちの1192年であった。頼朝が藤原泰衡と一族を討って奥州藤原を滅亡させたのは1189年であるが、それよりはるか以前から頼朝が征夷大将軍を望んだ最大の理由は、奥州藤原攻めを正当化するためであったという気がする。奥州攻めと征夷大将軍就任の時期は前後するが、後付であっても奥州征伐の大義名分としては十分有効であると考えたに違いない。秀衡、泰衡親子が義経をかくまった罪など建前に過ぎなかった。はなから源氏政権運営の脅威である奥州藤原を討伐することが目的だったのだから。しかし、その頼朝も後継者となった子息を立て続けにふたり殺され、源氏の征夷大将軍は3代で滅びたのだから諸行無常は平家に限らない。

9月25日（火曜日）の午前9時半に平泉のホテルを出発し東北自動車道にのり、7時間のドライブで千葉の自宅に到着した。三日間、1,070キロのドライブであった。

今回の東松島訪問によって、私が被災者の心により添えたとは思わない。彼らの悲しみや寂しさの深さや痛みは、その身になれない私に簡単に分かるわけがない。だが、分かろうとしようとする自分がいるという発見は悪くない。被災者の方々にとって生きるための戦いは、人々の関心が薄れるこれからが本番かもしれない。権力を持つほどに大きくなる「弱気をくじく」構造や、権力に巧妙におもねって権力を裏から助けるマスコミを、根底から変革するのは容易ではないが、あきらめる必要は無い。日本は、今の権力では手に負えない大きな問題を抱える。グローバルな社会の外圧に変革の引き金を引いてもらわなければならないかもしれない。　被災者を支援する具体的な方法を考え続けて、できれば行動に移すということと、世の中をよくするために自身の義務と権利と能力の範囲で政治に参加することが悠長に見えても確実にトライすべきことだろうという気がする。まだもう少し考えなければならないが。

東松島訪問の機会を与えてくださり、長時間にわたり貴重なお話をしてくださった石川住職には心からお礼申しあげます。

2012年10月16日（一部修正2012年10月28日）
大木雅文